特集

世界温泉めぐり

温泉には火山性のものやプレート構造に由来するものなどがあり、その泉質や利用の仕方は地域によってさまざまだ。本特集では世界の温泉を縦横にめぐり、その歴史や特徴を概観し、またそれが人びとの暮らしのなかでどのように位置付けられているかを紹介する。

世界の温泉にわけいる

南真木人
民博 学術資源研究開発センター

多くの日本人にとって温泉は、観光にしばしば付随する旅の目的のひとつであり、心身をリフレッシュしてくれる非日常の場であろう。温泉が豊富な土地であれば、近隣の温泉を日常的に利用する人も少なくないはずだ。古来、日本人は温泉を好み、情緒ある温泉街や湯治場まで生みだしてきた。だが、海外の温泉となると、入ったことがある人はあまり多くないようだ。そもそも世界の温泉情報は限られており、海外旅行ツアーに温泉が含まれることも稀である。海外まで行って温泉？という心理があるのだろう。国内とは対照的に海外旅行では、旅の目的のひとつに温泉があがることはあまりない。かくいうわたしも、中長期で何度か滞在してきたネパールとトルコで、かなり前に入ったきりだ。世界の温泉は人口に膾炙することがない未体験の領域といえそうで、そこにわけいってみようというのが本特集のねらいである。

偏在する温泉

世界を見渡すと、温泉は環太平洋造山帯（火山帯）やアルプス・ヒマラヤ造山帯、アフリカ東部の大地溝帯などに偏って分布する。火山があり地震も多い北米西海岸やチリ、ニュージーランド、台湾などの環太平洋の国ぐにには温泉がある。他方、ユーラシア大陸では、地下のプレートとプレートがぶつかり合う構造線に沿って温泉が湧く。マグマと接した地下水が熱せられて湧き出るためで、アイスランド、ドイツ、トルコなどヨーロッパや中東の温泉の多くはこれにあたる。

日本の温泉がそうであるように、世界各地の温泉の成分や色は源泉の泉質によって多種多様で、温泉の基準も各国の法律によって異なる。共通しているのは、湯の成分に効用が見出だされて浴用や飲用に供され、療養や保養に用いられていることだ。ただし、水着などを着るか全裸か、男女別か混浴か、レジャー的か療養的かなど、その入り方は各国の文化的・歴史的な背景により違ってくる。本特集ではネパール、台湾、中東、メキシコ、ドイツの温泉やサウナをめぐってみたい。

ネパール中部ラスワ郡チリメにある露天風呂（1987年）

チリメの温泉脇の宿泊小屋と先客のタマン人。独特のフェルト帽をかぶる（1987年）

ネパールの温泉「タトパニ」

ネパール語で温泉は「タトパニ」というが、文字どおりには「熱い水」「湯」を意味し、標高二〇〇〇メートル前後の山地に東西に走る主中央衝上断層帯に点在する。海洋プレートがもぐりこんで大陸プレートを衝き上げ、ヒマラヤを隆起させている断層だ。約三〇カ所あるといわれる温泉は、ここ二〇年のあいだに未舗装道が通じたところもあるが、かつては徒歩でしか行けない山中にあり、地元の人だけが利用する秘湯だった。特に印象に残っているのは、一九八七年に仲間とともに訪れたラスワ郡チリメの温泉だ。息を切らして斜面を登ると、忽然と茶色の湯を湛えた大きな露天風呂があらわれた。人里離れているので宿泊小屋もあり、たすき掛け布に両腕を入れた先客のタマン人の女性と子どもが、湯につかるわたしたちを呆然と眺めていた。八十年代の温泉とは、数本のパイプから湯が出る水汲み場のようなもの、川岸に石で囲った湯だまりのようなものがほとんどで、チリメの湯船は別格だったのである。

湯治客向けの宿や飲食店が軒をつらねるミャグディ郡の宿場町（2001年）

観光地前夜の湯治場

現在は多くの温泉が石積みかコンクリート製の湯船を備え、入浴料が地元の学校の運営費として活用されるなど地域経済を潤すところも出てきている。二〇〇一年に見たミャグディ郡の温泉は川岸に屋根つきのプールのような湯船が備わり、そうした温泉の先駆けといえる。療養を目的に地域一帯から湯治客が集まり、湯治場とよびうる宿場町ができて巡礼地のように賑わっていた。下着をつけて湯船に入り、暖まると頭から毛布にくるまって川原にうずくまる。これを繰り返すのがネパール流の湯治だ。現在ここは一日に数千人が訪れる一大温泉地になっているらしい。先のチリメの温泉も一〇軒ほどのロッジが建ち、「タマン遺産トレイル」を歩くエコツアーの外国人客で一時は賑わっていたが、二〇一五年のネパール地震で温泉も被害を受け、ツアー客が激減していると聞く。

二〇〇〇年代に入り施設が整備されてきた温泉だが、首都カトマンドゥの友人でこれらの温泉に入ったことがある人をわたしは知らない。集客域は以前より広がったとはいえ、国内温泉ツアーがあるわけではなく、都市住民が訪ねる「観光地」にまではなっていないのだ。街道を外れたところに、今なお地元の人しか知らない名湯があるのではないか、そんな期待をもたせてくれるのがネパールの温泉なのである。

生態資源と観光資源のふたつの顔をもつ温泉

野林（のばやし） 厚志（あつし）
民博 学術資源研究開発センター

このエッセイを書くにあたり、グーグル検索で台湾の温泉めぐりをしてみた。案の定、台湾には温泉が多いことをあらためて知ることになった。経済部（日本の経済産業省にあたる）の中央地質調査所によれば、温泉の「露頭（ロウトウ）」、すなわち源泉のある場所は一五〇カ所にのぼるという。台湾は日本の九州ぐらいの大きさなので、九州と温泉密度を比較するのもよいかもしれない。とはいえ、台湾の温泉の歴史はそれほど古くはない。

瀧乃湯の表玄関（2000年）

植民地と温泉

オーストロネシア系の原住民族の人たちが日常的に温泉に入っていたのかどうか、それに関する明確な歴史記録は残されていない。一七世紀以降の大陸中国側からの移民である漢族系の人たちにも、温泉につかるという習慣はなかった。台湾で温泉に入る習慣をつくったのは、台湾を植民地統治した日本人であったといってもよい。

植民地時代に総督府がおかれ、政治や商業の中心となった台北の郊外に、日本人は北投（ほくとう）という温泉街をつくった。北投の温泉は台湾で貿易にたずさわっていたドイツ人商人が、日本統治が始まる少し前に発見したのだが、日本統治が開始されてから日本人による温泉経営が始まった。植民地時代の温泉は当初、現地に赴任した警察関係の人たちの保養施設として設けられたところが多かった。その後、台湾におもむく日本人が増え、温泉は重要な観光資源となり、各地に温泉街がつくられた。場所によっては女性の性的な接客をともなう施設もつくられ、これらが第二次世界大戦後も続いたことから、台湾における温泉の評価はさまざまであった。

現在でもこのあたりは温泉旅館が軒を連ねている。一九〇二年に開業した銭湯である「瀧乃湯」はいまも営業を続けている。わたしもずいぶん前に入浴したことがあるが、とにかく熱くて、湯船に入るどころか湯あみもできず、汗だけかいて出てきた記憶がある。今ではリニューアルして、今時の銭湯になったとかならないとか。

このときに歩いた北投の温泉旅館街は印象深いものがあった。店の看板に熱海や京都、はては浅草といった日本の地名やひらがなまじりのものが立ち並んでいた。これが日本統治時代の名残なのか、それとも日本の温泉文化の掘り起こしなのかは、わたしにはよくわからないが、近年では日本の有名な老舗旅館やリゾートグループが進出したことでも話題をよび、台湾における日本と温泉の不可分な結びつきを感じずにはいられない。

北投温泉の案内看板（2000年）

めぐる観光資源

一九九〇年代以降、台湾の民主化が軌道にのり、あらたな社会づくりが目指され、その影響は温泉にもおよんだ。一九九九年は台湾の温泉観光元年ともいえる年で、温泉資源の環境保全および持続的な発展を目指した制度が整えられた。二〇〇五年には温泉法が施行された。この温泉法の特徴は、温泉の役割に原住民族の文化や経済の発展を見出だしていることである。

台湾では、温泉の多くが原住民族の居住地にあり、これも先住者の財産のひとつといってもよい。例えば、台北郊外にある烏來（ウーライ）温泉は、タイヤル語で温泉を意味するulayにちなんだ名前のタイヤル族の集落を中心としている。タイヤル族の民族博物館があったり、売店で温泉玉子と並んで売られているのは、原住民特製イノシシソーセージだったりと、単なるお湯場にとどまらない観光地となっている。

もともとは生活に根ざしていた温泉という生態資源が外部者とのかかわりのなかで観光資源となり、観光資源となった温泉がさらに土地の人たちの文化や食べ物を観光資源としていくという、温泉のつくる回路のようなものがそこに見えてくる。

烏来温泉の売店（2008年）

社交と癒やしの場

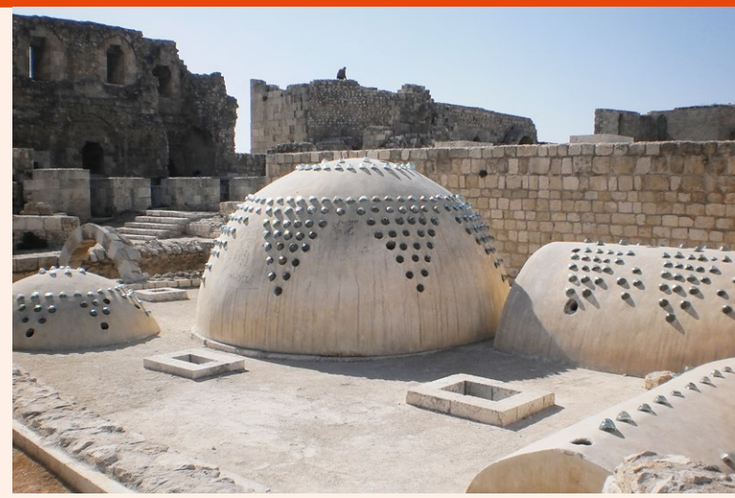
菅瀬（すがせ） 晶子（あきこ）
民博 超域フィールド科学研究部

歴史ある中東の「温泉」

中東と温泉。いかにもミスマッチに聞こえるが、じつは中東にはいくつもの天然温泉が湧き出ている。なかでも大地溝帯の北端であり地上最低地点である死海やガリラヤ湖の周囲には多く、イスラエルのハマット・ガデルやヨルダンのハンマーマート・マーインなどは、古代から有名な保養地であった。ハマットはヘブライ語で温泉、ハンマーマートはアラビア語で浴槽のある風呂を意味するハンマームの複数形である。天然温泉の意味もあるものの、今日ハンマームといえば、それはほぼ街なかにある蒸し風呂の公衆浴場を指す。

イスラーム圏で発達し、家庭に風呂が普及した今でも人びとに愛されるハンマームは、ギリシア医学とともに古代ローマ帝国から受け継がれたものだ。身体を清潔に保つだけではなく、社交と娯楽の場であったことも共通している。相違点を挙げるとすれば、古代ローマの公衆浴場は商店や劇場、宗教施設までそなえた一大娯楽施設であったが、イスラーム圏のハンマームは入浴とその後の休息に目的が絞られているという点だろう。古代ローマ時代には冷浴プールがあったが、ハンマームでは代わりに噴水と談話室が広くとられている。蒸気浴と垢（あか）すりで身体を手入れした後は、噴水で涼感を愉しみながら喫茶やおしゃべりに興じ、ゆったりと心身を休めるというのが、ハンマームでの人びとの過ごし方である。

ハンマームはまた、独特の建築様式を発展させたという点でも、魅力的な存在だ。イスラエル、ガリラヤ地方の古都アッカの旧市街には、ハンマー



シリア北部アレッポの城塞内にあるハンマーム。その歴史は13世紀に遡る。城塞は紛争で砲撃を受け、現在も補修が続けられているという（2011年）

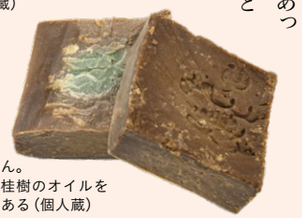
ム・アル＝バシャという、オスマン帝国時代のハンマームをまるごと保存した博物館がある。ここで見るべきは、やはりハンマームに不可欠の、高いドーム天井だ。明かりとりのための小さな円形のガラス窓がたくさんついていて、幻想的な雰囲気をかもし出す。この特徴的なドーム天井は、イスラーム圏の大都市ならば、古い街区で必ず見かけるものだ。歴史の変遷のなかで廃業の憂き目にあっても、その建築を惜しむ人びとがバーやレストランに改装し、今に残しているところもめずらしくはない。

ダマスカスのハンマーム体験

ハンマームには調査の合間に何度か行ったことがあるが、とりわけ印象に残っているのは二〇一一年二月、紛争状態になる直前のシリアのダマスカスでの体験である。旧市街バーブ・トゥーマのモスクのすぐ脇に、その古びたハンマームはあった。貴重品と荷物を受付で預けると、垢すりの四角い手袋と、アレッポ名産のオリーブオイルと月桂樹（げっけいじゅ）の石けん、それに番号札を手渡された。垢すりの順番になると番号を呼ばれるので、それまで身体をあたためておくようにと言われる。

服を脱ぎ、布一枚になって大理石の床に寝転ぶと、たちこめる蒸気の向こうに、丸い明かりとりの窓から夕刻の弱い光が差し込んでくるのが見えた。真冬のせいか温度が低く、身体がぬくもるという実感にやや乏しいが、この蒸気にゆらめく光には、絶大な癒やしの効果があった。いつの間にか、うとうととと居眠りをしてしまったらしい。

ダマスカスのハンマームからもち帰った垢すり手袋（個人蔵）



アレッポ産の石けん。中心の緑色は、月桂樹のオイルを使用している証である（個人蔵）

番号を呼ばれてはっと気がつくと、ベテランとおぼしき垢すり係、ムカッイセの女性が、むっつりとした表情で待っていた。指定された場所に横になると、乱暴にわたしの腕を引っ張りながら、ため息混じりにこんなことを言う。「今日はあんたで三〇人めだよ。もう肩も腕もだるくって、くったくただ。ああもう、さっさと帰りたい！」。日本ではまずありえない対応にめんくらってしまい、「そう、お疲れさま……」としか返せなかったのが、少々心残りである。肝心の垢すりはといえば、本当に垢が落ちているのかと心配になるほど生ぬるいものではあったが、入浴後にミントティーをすすりつつ、にぎやかに歓談する地元の人びとの姿を眺められたのは、貴重な体験であった。

今もあのハンマームと、そこに集う人びとが、無事であることを切に祈る。

トルコのハマムで使用されていた桶（個人蔵）

トルコのハマムで使用されていたサンダル（個人蔵）

メキシコの蒸気風呂、テマスカル

禪野（ぜんの） 美帆（みほ）
関西学院大学教授

大小のテマスカルがある（メキシコ市、2007年）

メキシコに、テマスカルとよばれる一種のサウナが存在する。しくみは、火で石、もしくは壁を熱し、そこに水をかけると蒸気が出るという、まさにサウナの原理である。それは先スペイン期から先住民が使っていたものだが、現代のメキシコの先住民が皆それを使っているかというと、そうではない。体験したことのない先住民もいるかもしれない。

オアハカの村落のテマスカル

わたしは、調査していたオアハカ州の先住民村落で、一九九〇年代にテマスカルに入る機会があった。村の中心地で商店を営む家が、空いた大きな部屋の内部にテマスカルをもっていた。しかし、普段は使っている様子はなかった。そのテマスカルは最大でも二名しか入れず、立ち上がることもできないような、狭く暗い空間であった。裸で入るとなかには治療をおこなう女性がいて、手に薬草と思われるものをもっていた。ちょうど神棚に備える榊（さかき）のような大きさである。その女性の家にわたしは泊まっていたので、テマスカルに招待してくれたのである。しかしわたしは、そのテレサおばさんが治療の力をもっているとは知らなかった。おばさんは商店主の姉なのだが、少し治療の心得があるという程度だったのかもしれない。

テマスカルのなかで、おばさんはときどき壁に水をかけて蒸気を上げ、怒ったような声を出しながら手にした薬草でわたしの体をたたいた。そもそも内部は日本で普及しているサウナと比べてもひどく熱いのに、それが体に触れるたびにものすごく熱く、うめき声を出さずにはいられなかった。雰囲気としては悪霊を祓（はら）うかのようである。この苦行から一刻も早く解放されたいが、おばさんがいいと言うまでは外に出られない。多分一五分以上はなかにいた。交代で、元々治療を依頼していた若い女性も入った。彼女はおそらく出産後だったのだと思う。産後の女性がテマスカルに入るというのは伝統的な行為であると、考古学関連の雑誌でも紹介されている。テマスカルから出ると、体は汗だらけで薬草の匂いもついていた。とても水浴びをしたかったが、それはテマスカルとセットではないようで、そのままおばさんの家に帰って寝ることになった。

ニューエイジな雰囲気に満ちた出入り口付近（メキシコ市、2007年）

メキシコ市のテマスカル

二回目の機会は二〇〇七年、首都メキシコ市内の旧先住民村落であった。この地区に住む母娘、さらに孫娘と一緒に、テマスカルを扱えるという男

性に有料で頼んでみようということになった。彼女たちは初めてテマスカルを体験するとのことであった。四十〜五十代のその男性は、「ある日雷に打たれて、啓示を受け、さらに修行をしたのだ」と説明してくれた。テマスカルの出入り口付近には一六世紀の絵文書からコピーした、しかしオリジナルからはかなり逸脱した絵などが描かれていた。男性は野外で薪を燃やして岩石を熱し、それをドーム型の大きなテマスカルの中央に置いた。手に薬草はもっていなかった。わたしたちは下着に大きめのTシャツなどを着て入った。このテマスカルは大きく、男性を含めて五人で入ってもまだ余裕があった。男性は声を荒げることもなく、オアハカの村のように熱すぎて苦しいということもなかった。一時間ぐらい入っていたと思うが、終盤ではオレンジの香りのする水かオイルも石にかけられた。テマスカルから出ると、男性から感想を求められた。このように、男性が治療師になった経緯を説明されたり、アロマの香りがしたり、感想を求められたり、テマスカルに古代メソアメリカ文明の神をモチーフにした絵が描いてあったりと、ニューエイジな感じは否めなかった。一緒に入った女性の家に帰って皆すぐにシャワーを浴びたが、本来はシャワーに入ってはいけないのかもしれない。

テマスカルの特徴は、何といっても治療師と一緒に入ることである。現在のメキシコでは、観光地でテマスカルに入るチャンスはある。希望する人たちの多くは神秘的な体験を求めているはずで、インターネット上の案内でもそうした雰囲気が演出されている。メキシコ市のテマスカルはそれに近い感じであった。しかし、わたしは、治療師に悪霊祓いのような怒りの声を浴びせられて、あまりの熱さにうめく方が効果が高い、別の言い方をすればご利益があるような気がする。ただ、先住民村落に暮らしていない者がそのようなテマスカルに入ることは難しいだろう。

ドイツの温泉事情

——なぜわたしがバーデン・バーデンに行ったことがないか

山中 由里子（やまなかゆりこ）
民博 学術資源研究開発センター

温泉のなかの温泉

老いも若いも、ぴちぴちもしわしわも、人間って十人十色で本当に不思議だなぁ、「人心の同じからざるは其の面の如し……」。と、温泉の湯船につかりながら人様の体をまじまじと観察し、その人の生き様を勝手に想像しながら存在論的思考に耽（ふけ）る。海外から日本に帰ってきて、「やっぱり日本はいいなぁ」と思う瞬間である。

文献調査や会議でよく行くドイツにも温泉はある。なかでもローマ皇帝カラカラも湯治をしたという南西部のバーデン・バーデンは、「温泉のなかの温泉」という意味の名前に違（たが）わず、世界的に有名な保養地である。まさにカラカラ大浴場に倣って一九世紀後半に建てられたフリートリッヒ浴場は、今でも温泉施設として使われていて、一度は行ってみなければと思いつつ、日本とはまったく違う入浴の仕方に抵抗があり、まだ訪れたことがない。

ドイツの温泉には、水着を着て入るレジャープール式や、全裸でさまざまな温度の風呂やサウナを順繰りに廻（まわ）る古代ローマのテルメ式などがある。また、医師や療法士の指導のもとに疾病を治す目的でおこなう本格的な湯治（クア）もある。バーデン・バーデンのフリートリッヒ浴場はテルメ式で、フルコース廻ると、シャワー→温風浴→熱風浴→シャワー→泡ブラシマッサージ→シャワー→蒸気浴→さらに熱い蒸気浴→温泉（三六度）→渦流浴（三四度）→水中運動（二八度）→シャワー→冷水風呂（一八度）→温かいタオルで体をふく→クリームマッサージ→くつろぎ部屋→読書室と、なんと一七行程もあるそうだ。

とても気持ちよさそうではあるのだが、わたしにとってハードルが高いのは、全裸・混浴が基本という入浴のお作法である。日本人女性でも、慣れるとその解放感がたまらないというツワモノもいるし、日本でもむかしは混浴が当たり前だったのだろうが、異性の他人に裸を見せるのは恥ずかしいという羞恥心は、かなり根深く刷り込まれているようで、疲れを癒やすどころか逆に緊張して肩が凝りそうで、わたしはどうにもなじめない。

バーデン・バーデンのフリートリッヒ浴場。2020年は秋まで休業が決定 ©GNTB/ Francesco Carovillano

健康的な裸体主義

これに対して、ドイツ人の裸体に対するタブー感覚はどうも違うようだ。ドイツには、フライケルパークルトゥーア Freikörperkultur、略してFKK（エフカーカー）という、文字どおりに訳すと「身体の解放文化」がある。日本ではFKKというと、ウッシッシ……な遊びができる「風俗」の場としてとらえている人も多いようだが、ちょっと勘違いである。もともとは、一九世紀の産業社会の急速な発展への反動としてヨーロッパ各地で起こった自然回帰運動がその起源にあり、さまざまな拘束から身体を解き放ち、自然のなかで文字どおり自然体で過ごそうよ、という極めて健康志向の裸体主義である。

湖畔や海辺、都会の公園にも、真っ裸で日光浴や運動をする人のためのFKKゾーンが設けられているが、その境界はときに曖昧で、普通にピクニックをしていて、いきなりドキッとするものが目に入ってくることもある。だが、「見たくないものを見せられた」と目くじらをたてる人はいない。裸体主義の積極的な実践者でなくても、裸に対してじつにおおらかな文化があるようだ。

この数カ月、マスク、フェイスガード、手袋、アクリル板、コンピューター画面という何重ものバリアで隔てられた人付き合いを強いられてきて、精神がだいぶ凝り固まってきている。あらゆる殻を脱ぎ捨てて、自然のなかを走り回れたら、さぞかし気分がよいだろうと思わないでもない。今ならコロナの反動で、FKKやドイツ流温泉に、チャレンジできるかもしれない。

オーストリア、ニーダーエスターライヒ州のバーデンの硫黄泉浴。20世紀初めごろの絵ハガキ。湯着を着たままの湯治の様子